

Ferdinando Frega – Nando the Scribe

REMEMBER THIS DAY



Gillettenarrative.com

このGilletteの日を覚えておけ

Gillette Audio — 書記ナンド

もう何もかも見たと思っていた。それからほどなく、至急の電話連絡を求めるメールが届いた。WALMART USA。

また悪ふざけだろうと思った—だが4月1日ではなかった。ただの6月22日、夏至が始まった翌日だ。最初の太陽が、誰かに少々きつくキスしすぎたのかもしれない。

すぐに妻に、買い物の代金は払ったのかと訊いた—カードの決済が通らなかったのかもしれない。妻は安心させてくれた。あそこでは買い物をしない。近所の店に行く。そこでは人と人とのつながりが、いつだってブランドより強い。

だが、いったい何の用だ？ オーナーの子どもたちに会った覚えはないし、過去に何か商売上の付き合いがあった覚えもない。マネージャーも、部門長も知らない—ただずっと昔、レジ係の女と短い恋があったが、レシート一枚ぶんしか続かなかった。

シャワーを浴びた。電話する前にすっかり目を覚ましておきたかった。コーヒーを飲み、妻に隣に座ってくれと頼んだ—英語がわかるからではない。女がそばにいて困ることはないからだ。

番号を押した。秘書が出た。名前を告げたとたん、彼女は飛び上がって叫んだ。あの方です、あの方です—少々お待ちください、ミセス・Walmartにおつなぎします。

なんてこった、オーナーと同じ名前じゃないか。なんという巡り合わせ—同姓の別人に違いない。

電話の向こうから聞こえてきたのは、スーザン・Walmart。創業者の親類なのか遠い従姉妹なのかは訊かなかった。

会いたいと言う。顔を見たいと言う。話がしたいと言う。そして、引き受ける条件は何かと訊いてくる。

そうですね—第一に、レッジョ・クラブリアまで来ること。第二に、オーナーのサイン入りの1ドルだけを持つてくること。

結構です。私が自分でサインします。

なんてこった。この人がオーナーだ。

彼女が訊いたのは一つだけだった。うちの店のなかで、女性が私の書いたもの—Gillette Narrative—にどう近づいていくと思うか、と。

答えはすぐに出た。しかも私には学位がない。

近づく姿など見えません。女はものを頼んだりしない。取っていくんです。昔からずっと。

表紙を一枚送ることにする—彼女の店のなかの女性たちについての、私のビジョンだ。ただし条件が一つ。私の本には、けっして金を払わせないこと。

彼女は微笑んだ。それから、誰もがいつも言うあの台詞を口にした。

それにしても、あなたいったい何者なの？

あなたが予想もしなかった男、それだけです。

ナンド